



橋の名は… 景雲橋

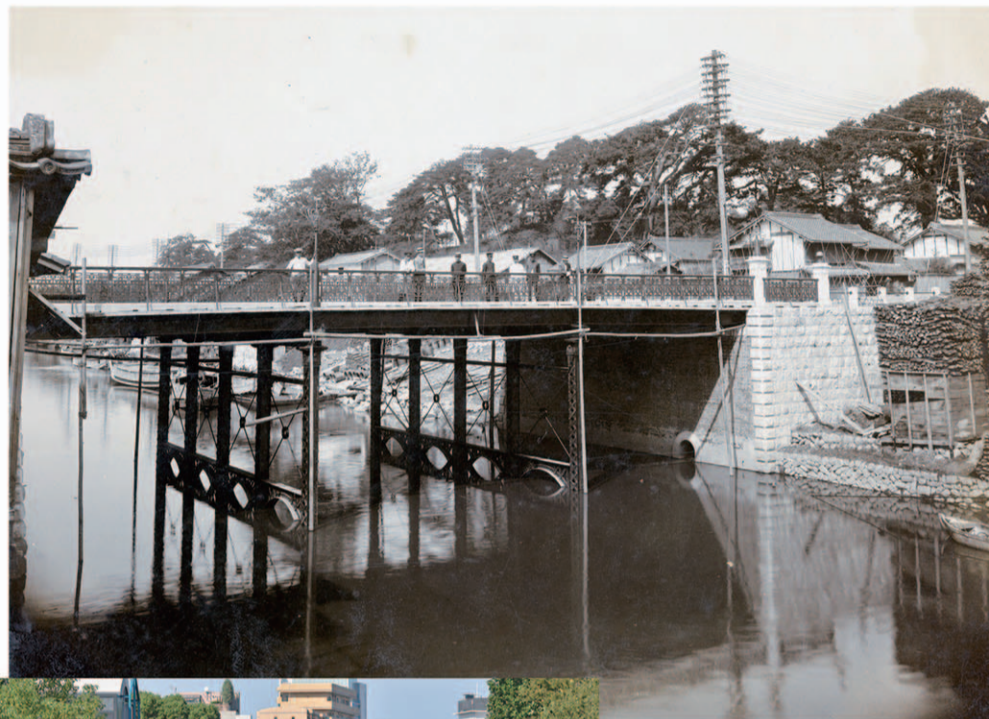
外堀通が堀川を渡る橋「景雲橋」は、天皇が名古屋離宮(皇居外の地に定めた宮殿)へ行く時に通るので、吉事の前兆に現れる雲の古事から景雲がふさわしいとして選ばれたようである。

明治26年から名古屋城の本丸は離宮になっており、たびたび天皇や皇太子が宿泊された。名古屋駅から離宮までのルートは広小路通と本町通経由であった。大正2年に江川線と片端筋を改修し、堀川に橋を新設して「御幸道路」にする事業が行われた。このルートは離宮へ行くのに7町(763m)距離を短縮でき、工事にあたっては宮廷から下賜金が与えられ、さらに拡幅を求められた。

景雲橋の架設工事は大正2年4月に始まった。木鉄混用橋で、長さが13間5尺(25.2m)、幅が8間(14.6m)、橋の四隅と中央に合計8基のガス灯が設置された。設計は、市の土木技師伊藤千代太である。この橋は昭和44年に現在の橋へと架け替えられたが、残されている写真を見ると、景雲橋から4年後の大正6年に架け替えられて今も使われている中橋と同様に、橋脚は細い鉄骨を組み合わせてリベットで留める造りとなっている。二つの橋は同じ設計者の手によるものかも知れない。工事を請け負ったのは、同時期にモダンな納屋橋への改築を行ったのと同じ栗田組である。

初架設 大正2年(昭和44年に現在の橋へ架替)

所在地 名古屋市中区丸の内一丁目 管理者 名古屋市

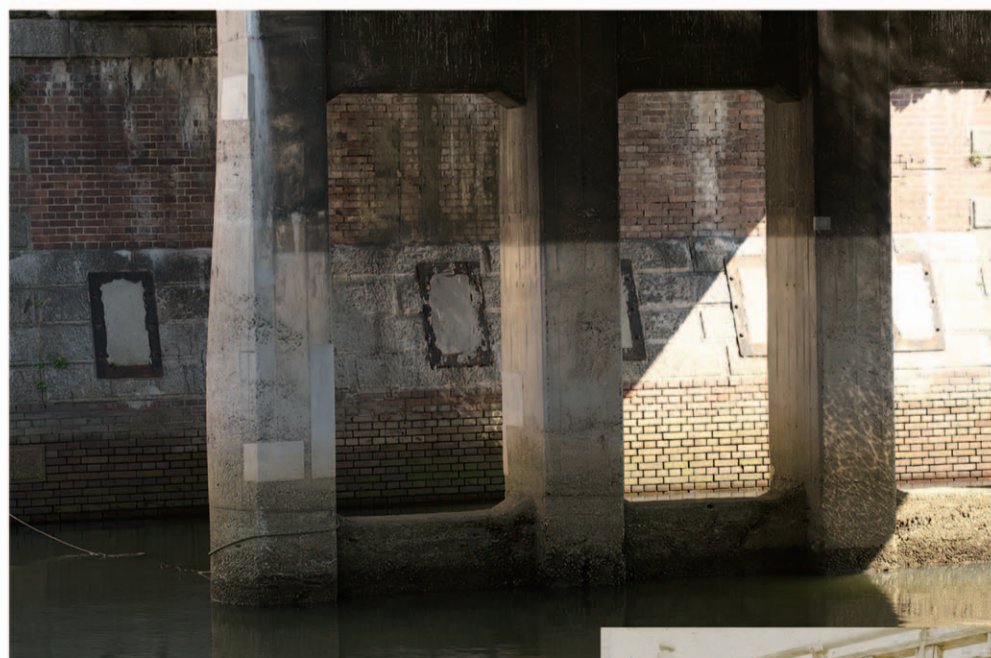


▲ 竣工間近な景雲橋 大正2年

◀ 現在の景雲橋



五條橋橋台に残る 不思議な穴埋め



▲ 五條橋の橋台部分(現在) アーチリブの沓(支承)の穴をセメントで埋めた跡

▶ 五條橋の木造アーチリブ 昭和11年(都市センター蔵)



五條橋の橋台は、下部と両端が切り石積みで中央部はレンガ積みだ。満潮時の水位の上あたりには、穴をセメントで塞いだように見えるものが、等間隔に6個並んでいる。いったいこれは何だろうか。

五條橋は江戸時代のはじめ、堀川開削時に架けられた「堀川七橋」の一つで、一番上流の橋であった。絵図に残る姿は橋脚付の桁橋である。明治34年に五條橋は架け替えられた。江戸時代同様に木橋だが、形状はアーチ橋となった。近代的な産業都市名古屋の幹線である堀川、そこを往来する船も比較にならないほど増え、木製ながら舟運の便を考慮してアーチ構造が採用されたのであろう。6本のアーチリブで桁からの荷重を受け止め、そのリブは兩岸の橋台に造られた沓(支承:橋の荷重や伸縮を受け止める構造物)で支えられていた。

現在の五條橋(ラーメン橋)の橋台に見られる、穴をセメントで埋めた跡は、明治にかけられた木造アーチ橋のアーチリブを支えていた支承部分であるに違いない。このことは、橋台そのものも当時の建造物であった可能性を伝えていることになる。

木造アーチ橋の五條橋

架設 明治34年(昭和13年に現在のラーメン橋に架け替え)

長さ:27.1m 幅:7.3m